

<分科会 C> 発表者：附属小学校 教諭 立石 泰之

テーマ：「教科、教材の特性に応じた「言語活動の充実」を図る指導方法の改善」
—学びの場を組織する授業づくりをとおして—

指導助言者：附属三原幼・小・中学校園長 深澤 清治（広島大学大学院教育学研究科教授）

1 主題設定の理由

「言語活動の充実」は、今回の学習指導要領の改訂の重要なポイントである。PISA ショックを経て、中央教育審議会は、「言語の能力は、知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力」であると提言し、これが学習指導要領全体のあり方や学習評価の考え方に反映された。すなわち「各教科等における言語活動の充実」として具体化されたのである。こうした背景を的確にとらえなければ、教育現場の実践において、言語活動が目的化し、活動が形骸化していき、教科等の学力の向上がなおざりになってしまう危険性がある。したがって、教科等の学習と言語との関係について研究を進め、言語活動の意義や言語活動充実の方策等を具体化する研究が必要である。

2 研究の概要

◎主題研究協議の充実

本校は教科担任制のもとで教育活動を行っており、これまで授業づくりの視点を学びの場の準備としての「教材の選定・分析、単元の構成」、学びの場の組織化としての「コミュニケーションの整理・方向付け」とし、各教科における学力育成のための指導法を中心に研究を重ねてきた。昨年度は、各教科での指導法を中心に教科の特性に応じた言語活動のあり方を出し合い、その中で共通する部分を見出していけるように協議を重ねた。

◎授業研究をとおした提案問題の検討

公開授業を設定し、授業後に授業者からの提案に基づいて学習場面における子どもの表現や様子をもとに、教科の特性に応じた言語活動のあり方、手立ての有効性について協議を行った。

3 成果と課題

昨年度は、1年間の校内研究授業を行い、各教科等における言語と思考との関わりについて理論面を中心に協議を深め、以下のような点を確認、再認識できた。

○ 研究成果

- ・ ことばが「万能」ではないことを教師が自覚することの重要性
- ・ 言語活動における学習者の課題意識と「受信（聞く、見る、読む）」の重要性
- ・ 話し合う場面での「根拠を比較する」→「分析・解釈する」→「判断する」活動における各教科等の特性や教科等独自の思考
- ・ 自己の考えや技能の修正を図るための「共有されたことば」の必要性

○ 課題

- ・ 教科等を横断するものと教科等固有のものを整理し、明らかにしていくこと。
- ・ 確認された成果をもとに、各教科等の授業づくりにおける具体的な手立てについて、その有効性について明らかにしていくこと。

<分科会 C> 発表者：附属三原中学校 教諭 松尾 砂織

テーマ：「文法事項の習得とコミュニケーション能力の活用について」

指導助言者：附属三原幼・小・中学校園長 深澤 清治（広島大学大学院教育学研究科教授）

1 主題設定の理由

新学習指導要領及び教育要領実施により、小学校に外国語活動が導入され、特に音声面を中心として外国語を用いたコミュニケーション能力の素地が育成されることになった。これにより、中学校では単に外国語の文法規則や語彙などについての知識を身に付けさせるだけでなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用させることができる能力の基礎を養うことの必要性がより一層求められることになる。そこで、文法事項を活用できる場の設定を工夫し、学んだ知識を活用して行うコミュニケーション活動の在り方を考え、授業内だけでなく、校外活動でも行える教材の開発を行うことにした。

2 研究の概要

以下、学年ごとに事例を紹介する。

① 国のペンパルに自己紹介文を書く取り組み【7年生】

米国NC州グリーンビル市、エッペス中学校7学年教諭であるMs. Joanne McClellanと文通の取り組みを始めて今年で3年を迎える。これまでは8、9年生を対象として、年間通じて2往復のペースを目標に実施し、継続してきたが単元に位置づけずに実施してきた。しかし、今年度からは使用する教科書および単元配列が変更したため、7年生の単元「My Project1 自己紹介しよう」の学習内容を使って、ペンパルにあてた自己紹介文を書く活動を実施した。9月以降に米国のペンパルから手紙の返事が届く予定なので、手紙が届き次第、教育実習の合間を見て、手紙の読み取りと返事を書く指導を行うように計画している。

② 自分以外の他者を紹介する取り組み【7年生】

代名詞の主格 (He、She、They) の定着を図るために、オリンピック選手を紹介する対話練習をペアで行い、対話で使った表現を活用して、最終的には他者を紹介する文を書いた。代名詞の概念と使用場面を言語知識として習得させることから始めた。また、形容詞を用いて、その選手を表す表現も導入しながら、ペアでの対話練習を行わせた。最終的には、オリンピック選手を紹介する英文を個人で考え、規定した文数で紹介文を書く取り組みとした。この取り組みを、今後は Show and Tell へと結び付け、スピーチの指導へとつなげていきたい。

③ ハンバーガー店で食べ物や飲み物を注文する買い物の場面の取り組み【8年生】

食べ物や飲み物を注文する場面を暗唱し、お金の支払いから、購入した物の受け渡しまでをALTとともにやる取り組みである。支払いの場面では、米国で使用している硬貨と紙幣の模型を使って、やりとりを練習させた。実際に米国のお金の模型を使って支払いをさせ、ALTが渡したおつりが違っていった場合は、その場で間違っていることを伝え、交渉するなどの指導も行った。

3 成果と課題

生徒が書いた学習のふり返し記録を見ると、学んだ文法事項を用いてコミュニケーション活動をしたことが伺える。例えば、8年生のふり返し文には「注文の仕方についてよく分かった。これを生かして実践してみたい。前回やった注文の仕方を使って、正しいものを注文することができたのでよかった。」など、より意欲的に取り組む姿がある。7年生のふり返し文の中には、「複数形は動詞が are、他の名詞なども複数形になることが分かった。主な形容詞も分かったし、He、She、Theyも分かった。SheとHeとTheyは一度紹介してから2回目に使う。」とあり、文法事項に対する理解度に触れたものもあった。今後も教材開発を続け、文法事項を活用したコミュニケーション活動の充実を図りたいと思う。

<分科会C記録>

1 発表1の概要

(1) 研究主題の設定理由

教科等の学習と言語との関係について明らかにし、言語活動の意義や言語活動の充実の方策等を具体化したいと考え、各教科等で、各教科の特性や適切な言語活動の在り方とその条件について研究を行った。

(2) 成果と課題

- ・ことばは万能ではないことを教師が自覚することの重要性
- ・言語活動における学習者の課題意識と『受信（聞く、見る、読む）』の重要性
- ・話し合う場面での「根拠を比較する」→「分析・解釈する」→「判断する」活動における各教科等の特性や教科等独自の思考があること
- ・自己の考えや技能の修正を図るための「共有されたことば」の必要性

2 発表2の概要

(1) 主題設定の理由

小中学校英語の接続、活用場の設定＝学んだ知識を活用して行うコミュニケーション活動の在り方、授業内だけでなく、校外活動でも行える教材の開発を行った。

(2) 研究の概要

自分以外の他者を紹介する取り組み・米国のペンパルに自己紹介文を書く取り組み・ハンバーガー店で食べ物や飲み物を注文する買い物の場面の取り組みを進めた。

(3) 成果と課題

学んだ文法を用いてコミュニケーション活動を意識、意欲的に取り組む姿、文法事項に対する理解、教材開発を続け、コミュニケーション活動の充実を図りたい。

3 発表1への質疑応答

質問1：子どもたちにコミュニケーション活動の必然性を持たせることについての研究はされているのか。

回答1：まず単元の構成、学びの場の準備に関わり、子どもたちにどのような課題をどの順番で考えさせていくのかを大切にしたい。その課題の積み上げによって次の課題を課題として捉えることができる。また学びの組織化として、教材と教師、教材と児童、児童と児童の間でずれや違いが生じ、子どもたちの対話が始まる。そのプロセスを大切に授業を行うことで、子どもたちにコミュニケーションの意識づけを行うことが必要であると考えている。

質問2：学校として、コミュニケーションの整理、方向性の一致はどのようにされているのか。

回答2：各教科、指導者によるので整理や方向性の一致はさせていない。

質問3：「言語活動の充実」のカギ括弧をあえてつけている意味は何か。

回答3：一般的に言われている言語活動と違った、私たちなりの解釈をして新しい考えを打ち出そうとする意図でつけている。例えば国語の言語活動でいうと「ものづくり」をすることになるのではなく、文章の解釈の違いを基にして言語活動を行うといったものが挙げられる。

質問4：学びの集団作りで取り組まれていることは何か。

回答4：本校では、互いに授業の見合いをすることで、受け継がれてきたこと、例えばメタ認知的な思考を主とする発問を行うことや集団作りでの良いところをまねることで行っている。

4 発表2への質疑応答

質問1：自己紹介手紙について、中1レベルで実践的交流を行うのは大変である。どういうコミュニケーションで、どういうやりとりが行われるのか知りたい。

回答1：スピーチの単元であるが、手紙を通して自己紹介をすることを目的にして、書く活動へつなげた。書く相手（文通相手）がいるということで、リアリティーが増し、質問がくると

コミュニケーションになる。アメリカの子は自分のことについて語ることが多いが、こちらには書ける範囲で書いている。9月に返事が来る予定で、継続的に取り組む。

質問2：小中の接続について、スムーズな接続が言われている中で、附属三原の5、6、7年生の授業がどう繋がっているか教えてほしい。

回答2：系統的にしていくのは今年度から行う。これまで「国際コミュニケーション科」として幼稚園から小学校、中学校と英語活動を中心とした体験活動を行ってきた。異文化に触れる素地はできていた。

意見：小学校の就学旅行で奈良に行ったとき、70人近くの児童が英語でインタビューし、満足感を感じていた生徒の姿が見られ、実践する大切さを感じた。質問したらそれ以上のものが返ってきた様子で、笑顔で対応していた。

質問3：ALTと実際の場面を作るような、その他の実践を知りたい。

回答3：9年生の校外学習で、平和公園で海外から来られた先生を案内するエスコートプロジェクトを行っている。難しいことにトライしたり、準備したことが思うように進まないことも体験する。また、平和というテーマで意見交流し、自分の考えを述べることで自分を見つめる機会となっている。うまくいかなくてもここまで言えた、わからなかったからがんばりたいという感想が聞かれる。

質問4：4技能のバランスはどれくらいのイメージか。

回答4：4技能すべてを同時には難しい。知識をしっかりと身につけた上での活用が大切と思う。

質問5：「発信」―「受信」が大切。松尾先生の発表では「発信」を工夫されていた。情報を「受信」することについて、工夫していることがあれば、教えてほしい。

回答5：受信した時の解釈はいろいろで、手紙には意図があり、わからないことがあったら質問し直してみるといいとアドバイスしている。受け取る側の指導を今後継続指導である。

5 指導助言

◎ 今後どう言語活動を充実させていくかを3点示す。

(1) 言語活動の場

- ・ 附属小の実践：教科横断型。教科の中で、どのように言語活動を図っていくか、論理的に、相手を考えた受信、活動の必然性などの工夫がなされていた。
- ・ 三原中の実践：縦の英語活動のつながりの実践。文法はコミュニケーションを支えるための手段を意識。先生以外の相手との練習（生徒同士、教室を離れてのコミュニケーション）が、言語活動の場として工夫されていた。

(2) 言語活動の充実のために

- ・ なぜ(why)コミュニケーションしなければならないか。必然性を考えること。意欲が希薄になっている社会である。
- ・ どんな言語か(what)。教科言語（各教科必要な言語）知っておかなければいけない語彙がある。Academic word list 基礎日本語が必要。
- ・ どんなふうにしてそれを使うか(how)。例えば相手を海外へ。コミュニケーションには相手が必要。わかった相手ではなくわからない相手が望ましい。いかにその場で即応するか、即効性が今大切である。

(3) 教科言語から社会言語へ

教科の中での言語は、トレーニング的なコミュニケーション。これから求められる言語は教室内言語ではなく社会言語ある。コミュニケーションはうまくいかないことが当たり前である。知識や技能を広げて、いろんな正解を受け入れ、成長型のコミュニケーションにするためにどうつなげていくか（社会言語）、どう豊かな言語性を身につけさせていくかをすべての教科で実践していくことが必要である。

<分科会D> 発表者：附属三原小学校 教諭 小早川 善伸
テーマ：「運動が「わかる」「できる」、学びを「いかす」授業の創造
～視聴覚機器の活用を通して～
指導助言者：附属東雲小・中学校長 林 孝（広島大学大学院教育学研究科教授）

1 主題設定の理由

体育の授業をしていて、子どもが、「自分がどう動いているかよくわからない。」とつぶやいた。自分の運動を見た周りの人々があれやこれやというが、それができているのかできていないのかはわからないというのである。そこで、子どもたちが自分の動きを自分で確認したり、自分の課題やその動きのポイントを把握したりしながら、運動が「わかる」「できる」楽しさを感じ取ることができるための視聴覚機器（iPad2）を活用した授業づくりの必要性を感じた。

2 研究の概要

- 時期：平成24年2月
- 対象：小学生第6学年40名（男子：18名、女子22名）
- 単元名：「ソフトバレーボール」全7時間

特にスパイク場面に焦点を当て、その時の体の使い方についてiPadを活用して学習を進めた。5人一チームで1台のiPadを使い、掲示されたスパイク動作の模範となるコマ送り写真と、自分がスパイクしている映像とを比べながら、より良い動き方を身につけていた。自分がスパイクしている映像は「レッスンパッドタイプG」いうアプリケーションを使い、撮った動画をコマ送りにして、体の動きを細かく観察することができた。

子どもたちは特に、打点の高さやひじの伸びを視点にもち、より良い動き方に向けて個人練習したり、チーム内でアドバイスし合ったりすることができていた。

3 成果（○）と課題（●）

- 模範となる動きと自分の動きとを比べることができたので、一人ひとりの課題がはっきりわかる指導ができた。
- 自分の動きをコマ送りにしながら、子どもたち同士アドバイスし合うことで、的確にアドバイスできるようになった。
- 技術練習に進んで打ち込む子どもに、自分の動きを客観的に見る必要感をもたせることができなかった。
- 動きが速すぎる場所は動画をコマ送りにしてもわかりにくい場面があった。

以上のことから、視聴覚機器を活用することは、自分の動きの課題を的確に把握し、その解決にむけて意欲的に運動に取り組む子どもたちを育てることに効果的であることが分かった。

しかし、課題としては、自分の動きを客観的に見て、それを学習に生かすことに意義を見出す子どもたちの発達段階について考えることや、映像を使うことが有効である教材や授業場面の研究が必要である。

<分科会D> 発表者：附属福山中・高等学校 教諭 三宅 幸信
テーマ：「中学校「保健」の発展的学習の可能性について」
指導助言者：附属東雲小・中学校長 林 孝（広島大学大学院教育学研究科教授）

1 主題設定の理由

急速且つ大きく変化している社会に対応するためには、問題解決に主体的に取り組み、持続可能な社会の構築を図れる人間を育てる教育が求められている。

当校では研究開発学校の指定を受け、新教科「現代への視座」の創設に取り組んできた。保健体育科は、中2での「体内環境」を担当し、基礎的な力を身につけると共に、問題解決能力の育成を目指し、一定の成果を得ることができた。が、担当した教科としての足元を振り返れば、中学校保健分野の学習は全国的には十分に活性化されているとは言い難い現状と憂いがあり、この成果を「保健の学習」に還元する必要性を感じるのである。

そこで、基礎的・基本的な知識の暗記や再現にとどまらず、知識を活用する学習活動によって、思考力・判断力など現在の学習指導要領が求めている資質や能力が育成されるよう、保健分野の発展的学習の授業構成を試み、保健学習の在り方を検討することとした。

2 研究の概要

次のような、生徒の活動の「場」の設定の工夫がどのような効果を生むかを検証する。

(1) 「知る」場を確保する<科学的な基礎知識の理解> (2) 「深化する」場を確保する<考える場を共有し、自分の考えを深める> (3) 「確かめる・納得する」場を確保する<データを収集・検証。まず一人で考え、自分の考えをまとめる。次にみんなで考え、お互いの思考の突き合わせを通して、深化と広がり確保> (4) 「自分との関わりで吟味する・生活に生かす」場を確保する<体験と知識、生活課題と自分の現実世界とを結びつけ、レポート。知識や理解を整理するだけでなく、日常の自分の生活のあり方自体を整理し直し、適切な意志決定や行動選択ができるようにアドバイス>

3 成果と課題

学習指導要領に応じられるような発展的学習内容の授業構成を試みたわけであるが、体験や考察等を通して、生徒は恒常性に対する共通の知識の獲得や理解を深め広げることや、測定の結果や調べ学習の結果を、自分の生活との関わりで考えながらレポートにまとめるという、表現についても意欲的に取り組むことができたと感じている。平面的な知識の獲得ではなく、立体的・多面的な方法でのアプローチとなる構成とすることで、関心・意欲をもって、積極的に取り組むことができた生徒が多かった。

「知識基盤社会」の時代といわれているにもかかわらず、「科学的思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題あり」と言われる現状に対しては、「授業時数の確保」と共に「考える」という過程を、丁寧に丁寧に繰り返したり、素材をどのように料理してゆくののかという授業の展開・構成に地道な工夫が今後益々必要であると思われる。保健分野を担当する教師の責任は重く、さらなる研鑽が必要であると、自戒も込めて素直に思う。

<分科会D記録>

1 発表1の概要

《6年生 ソフトバレーボールの実践において》

◎ 「わかる」に焦点をあてる

自分の姿を視覚的にとらえることを目的として『iPad2』を活用し、個人技能の習得を目指して体の動きを細かく観察させた。コマ送りした動画と掲示物で提示された模範となる動きと比較させることで、自分の課題が見えるように工夫した。

『iPad2』を児童が効果的に活用することができるように、教師がデモンストレーションで使い方を示していると、自分たちですぐに扱えるようになった。しかし、スパイク動作などは早すぎてうまく撮影することができなかつたり、どの角度から撮影したらよいか分からなかつたりして、より効果的な活用方法を模索していく必要もあると課題も挙げられた。

◎ 今後の活用について

視聴覚機器を活用することは、視覚的に自分の動きをとらえ、課題を的確に把握し、解決に向けて取り組むことができるので、非常に効果的である。ただ、運動量の確保の問題やどの場面で機器を使うのか、どの教材で活用することが適しているのかを研究していく必要がある。

2 発表2の概要

当校は2003年から研究開発学校の指定を受け、新教科「現代への視座」の創設に全教科で取り組んできた。保健体育科は理科・家庭科と共に、中学2年生での「環境」について担当した。「自然(外的)環境」「体内(内的)環境」の二つのテーマの下、複眼的見方や探求の方法、科学的思考力、読解力、まとめ方や表現力等の獲得を目指し、一定の成果を上げることができた。その成果を中学校保健分野の発展的学習内容に還元し、保健学習が活性化する授業の在り方を検討した。

保健体育科では、「体内環境」の「体温調節の仕組みから恒常性維持の不思議を考える」というテーマに絞って保健分野に還元しようとした。自律神経系・内分泌系・免疫系がお互いに関連し合いながら総合的に働くことで体温が一定に保たれている、という科学的認識を獲得するために、導入では「場①(科学的な基礎知識の理解)」体内時計を取り上げ、「場②(考える場を共有し、自分の考えを深める)」暑いときと寒いときでは、体はどのように反応し、その反応が何のために起きているのか、問いかけ、整理しながら、理解・認識を深めていった。それと並行して「場③(データを収集・検証。まず一人で考え、自分の考えをまとめる。次にみんなで考えお互いの思考の突き合わせを通して、深化と広がり確保)」個人の体温変化のデータ(2日間30分おきに計測、その時何をしていたかなど)を収集し、「場④(体験と知識、生活課題と自分の現実世界とを結びつけ、レポート。知識や理解を整理するだけでなく、日常の自分の生活のあり方自体を整理し直し、適切な意思決定や行動選択ができるようにアドバイス。)」そのデータの分析し、グループでお互いの分析を交流しあい、それをクラス全体で交流しあうという4つの「場」を設定し手順を踏んだ。主体的な健康達成の実践者として自立していける力を育むには、授業の展開・構成にさらなる工夫が必要であると思われる。

3 発表1への質疑応答

質問1:『iPad2』を使う時間は45分の中でどれくらいなのか。

回答1:『iPad2』が動いているのは10~15分間。

質問2:運動が苦手な子にとって、『iPad2』を活用してどのように「わかる」のか?

回答2:できてない動きのポイントが「わかる」→できていないポイントを重点的に練習する→意欲向上につながる。

質問3:アプリの可能性は?

回答3:器械運動は自分の動く姿をしっかりと見たいと子どもも思っているので、活用してみたい。

意見1:自分の姿をしっかりと見たいならば、タイムライン再生の方が効果的では?

タイムライン再生とは、ビデオで映す→20秒後に画面に映る

※タイムライン再生では動画を止めて見ることができないので、ポイントを絞ってみることができなかった経験が過去にあった。今回の『iPad2』のようにコマ送りができたらよい

のだが…。

質問4：『iPad2』活用の留意点は？

回答4：撮影するポイントを押さえておかないと、使えない。

「動きの中で体のどの部分を見せたいのか？」ということ教師が明確にしておかないといけな。撮影することも、「何を見るのか」を子どもが意識することにつながっていくのかも。

意見2：理科で水滴が落ちる様子を撮影できるデジカメがあるので、これならスピードの速い動きにも対応できるのではないかと思う。

4 発表2への質疑応答

質問1：各教科で役割分担のようなものがありますか？

回答1：週2時間年間70時間を前期35時間、後期35時間に分けて、保健体育科と理科・家庭科で担当している。

意見1：小学校では、4時間をまとめて取り、身の回りのことと関連させて、単元をまとめて実施している。

意見2：中学校では季節に応じてやったり、まとめてやっている。パソコンルームを使って調べ学習などに取り組んでいる。

質問2：養護教諭の方で授業をしたことのある方がいらっしゃれば、保健指導と保健学習について？

回答2：保健学習は体系的に学び、保健指導は行動変容を体験していくことを念頭において授業していた。

意見3：交流していくことが生徒たちのためになるのではないかと思う。

意見4：中学校では、4つの領域では配列を並び替え、タイムリーに、生活実態を考え、養護教諭や家庭科の先生と連携するなどして、子供たちの学びの深化につなげる工夫をしている。

3 指導助言

学習指導要領改訂で「生涯にわたって」という文言が入った。生涯にわたり、自分を深め自分に合った方法で学び続ける、運動に親しんでいくことが大切である。したがって、体育科の中の学習でも12年間の系統を考えた学習を進めていくことが必要である。

実感をともなった学習が大切だが、そのためには、自分のこととして体験し、「納得」することが必要である。実技ができるようになるためのコツは「言葉ではわからない」のではなく、それを「言葉で伝わるようにする」ことに意味がある。

「やってみてわかる」と「見てわかる」をつなぐiPadの活用は、大変興味深かった。しかし、友だちから伝えられたアドバイスを理解し、自分の運動につなげることができないから視聴覚機器を利用するというのでは、効果的な手立てとはいえないと思う。ことばを通して、相手に分かるようにしっかり伝えられ、受け止めていけることを目指していくことが大切だと感じる。したがって、ことばと体験により、実感し納得しながら学習を進めていけるのが望ましい。これらの活動を助ける役割として、視聴覚機器を活用すればより、学習がひろがり、深めることにつながるとよいと思う。

学習に必要なことは、『先生から学ぶ（知ること） → 一人でも学ぶ（自立した学習者） → みんなと学ぶ（共生して学ぶ）』という学習過程の中で、先生をモデルに学び、そこで学んだことを自分でやってみて、友だちとさらによい方法を模索しながら学習することであると考える。そこに、「生涯にわたって」共に学ぶ姿勢や、自律、共有する姿が見られるであろう。

<分科会 E> 発表者：附属三原幼稚園 教諭 君岡 智央

テーマ：「豊かに表現する子どもの育成をめざして」

～お楽しみ会における劇遊びに焦点をあてて～

指導助言者：附属幼稚園長 松尾 千秋（広島大学大学院教育学研究科教授）

1 主題設定の理由

本園では、1月（年長）、2月（年中、年少）に劇遊びを通して表現する楽しさを味わう『お楽しみ会』を行っている。このお楽しみ会では、子どもたちが自分たちでストーリーをつくり、劇遊びに必要なものも自分たちで揃えていきながら、それぞれの役になりきって表現する。また、劇遊びを通して子どもたちは個々で表現する楽しさを味わい、次第に友だちの表現に刺激を受ける中で様々な表現の方法があることを知ったり、友だちと表現することを楽しんだりするようになる。こうした姿こそ、劇遊びにおいて子どもたちが豊かに表現しているととらえている。では、お楽しみ会における劇遊びを通じ、子どもたちが豊かに表現するには教師がどのような手立てを講じていく必要があるのか。必要な手立てについて探っていくことにした。

2 研究の概要

子どもたちが友だちと話し合いを重ねながら、一緒につくり上げていく劇遊びこそ、子どもの表現に豊かさが現れてくると考える。したがって、お楽しみ会における劇遊びのねらいと具体的な手立てを次のように設定し、研究をすすめていくことにした。

(1) ねらい

『劇遊びを通して友だちとストーリーをつくったり、必要なものをつくったり、役になりきったりして表現する楽しさを味わう』

(2) 具体的な手立て

- ・表現したくなる絵本や昔話の活用
- ・友だちと劇をつくる楽しさが実感できるかかわり
- ・表現するための素材や用具が使える環境構成
- ・役になりきって表現することに楽しさが感じられるかかわり

3 成果と課題

(1) 成果

- ・子どもたちの劇作りに対する自分の思いや考え、イメージが膨らんでいくようにし、膨らんだことを友だちと伝え合えるようにすることが大切である。
- ・友だちと伝え合った思いや考え、イメージを実際に表してみながら、劇遊びに生かせるようにすることが大切である。
- ・大道具、小道具などを本物らしくしたり、劇のイメージに近づけたりするために工夫する姿が大切であり、そうした姿に向かっていけるように環境を構成することが必要である。
- ・子どもたち自ら、それぞれの役の動きや表情、声などの特徴をとらえて意欲的に表現できるようにかかわることが大切であるということに改めて感じた。

(2) 課題

・劇遊びの中で自分の役をどう表現したらよいかわからず、困ってしまう子どもたちがいることも確かである。そういった子どもたちに対し、具体的な表現と一緒に考える教師のかかわりが必要になってくると考える。

＜分科会 E＞ 発表者：附属東雲小学校 教諭 天野 紳一
テーマ：「鑑賞リテラシーを高めるコミュニケーションの在り方」
－第4学年における鑑賞学習の実践より－
指導助言者：附属幼稚園長 松尾 千秋（広島大学大学院教育学研究科教授）

1 主題設定の理由

他教科と同様、図画工作科においても言葉力の育成が重要な視点の1つであることは言うまでもない。児童の表現や鑑賞の原動力となる「感性」は、色や形といった視覚的情報から得られるイメージのみではなく、それらと結びついた言語とともに深まり、豊かさを増すものと考えらるからである。とりわけ鑑賞学習において感じたことや思ったことを話したり、友人と話し合ったりする場面において、言語力は不可欠な要素と言える。そこで、絵画鑑賞の経験が少ないI期(第4学年)の児童を対象に、年間を通して様々な絵画作品との出会いを設定し、その印象を言葉を媒体として伝え合うコミュニケーション活動を取り入れた授業づくりを通して「鑑賞学習に必要な言語力(鑑賞リテラシー)」を高めたいと考えた。

2 研究の概要

(1) 研究仮説

コミュニケーションを取り入れた鑑賞学習の中で1つの美術作品を多種多様な言葉で表現する経験を重ねることが児童の内言の発達を促し、鑑賞リテラシーを高めるであろう。

(2) 授業の実際

第4学年、37名の学級を対象に年間を通して4時間の独立した鑑賞授業を実施した。

アレナス(Amelia Arenas, 1956)が、その著書『TEACHER'S KIT 1』(淡交社、2005)の中で提唱した対話型鑑賞の手法を参考にしたものと、アートゲームを中心活動とするコミュニケーション型の鑑賞学習である。学習の中で出された児童の気づきや思いは必ずワークシートに記録するようにし、仮説検証のための材料とした。

授業A(6月):アートゲーム『どの絵がピカソ?』

授業B(11月):対話型鑑賞『ルソーの描いたへび使い』

授業C(12月):アートゲーム『PRESENT FOR YOU～シャガールの不思議な世界』

授業D(2月):対話型鑑賞『拝啓 ゴッホさま』

(3) 検証方法

児童の書いた気づきを次の3段階に分けて集計し、仮説に基づいた鑑賞学習を経験することによってその量と質の推移について検証した。

気づきⅠ…描かれている色や形、物や場所、人物などを指し示す言葉をそのまま書いたもの(個人的な像や解釈を含まないもの)

気づきⅡ…画面やモチーフから、自分なりに感じ取った印象(美醜や明暗など漠然とした感覚を含む)を言葉にしたもの

気づきⅢ…色使いや描かれ方、構図や技法に関する気づき、画面に直接描かれていない音や匂い、状況や雰囲気などを推察した言葉、主題に迫る象徴的な言葉など(短文も含む)

3 成果と課題

今回は授業を重ねるごとに、児童から生み出される言葉は量、質共に向上が見られた。しかし、それが単に学習経験の積み重ねによるものであるのか、コミュニケーションを活性化させる授業づくりが具体的にどのように功を奏したのかということについては、今後さらに明確にしていく必要がある。

<分科会E記録>

1 発表1の概要

(1) 研究の目的について

幼稚園教育要領（平成20年度改定）より

領域「表現」のねらい・・・感じたりするなどして楽しむ

内 容・・・他の幼児の表現に触れられるように配慮

教師のかかわりと環境構成・・・改定部分をふまえて行う

自分たちでつくり上げていく劇遊びとは

(2) ねらいと手立てについて

お楽しみ会における劇遊びのねらい

劇遊びを通して自分たちでストーリーをつくったり、必要なものを作ったり、役になりきったりして表現する楽しさを味わう

ねらいに対する手立て

1. 表現したくなる絵本や昔話の活用と素材の用意
2. 友だちと劇をつくる楽しさが実感できるかかわり
3. 表現するための素材や用具が使える環境構成
4. 役になりきって表現することに楽しさが感じられるかかわり

(3) 実践について

劇「3匹のこぶた」（3歳児）より

劇「のんびりきかんしゃポーくんとサーカス」（4歳児）より

劇「マーシャとくま」「ふるやのもり」（5歳児）より

(4) 成果と課題について

手立て1・・・子どもたちの想像力を刺激してイメージやストーリーを広げることができ、それをきっかけに主体的に劇遊びを始めたり表現を楽しむ姿も見られるようになった

手立て2・・・様々な表現方法や友だちのイメージや考えなどがあることに子どもたちが気づくことができ、気づいたことを生かしながら表現することができた。

手立て3・・・子どもの意欲をより高めていくことができ、友だちとのともに試行錯誤しながら作り上げていくことができた。

手立て4・・・子どもたちが全身を使っていきいきと表現し、なりきって楽しめるようにすることができた。

○ 課題

自分の思いなどが出せない子どもたちの思いや考え、イメージが劇づくりの場に出せるようにしていく必要がある。

○ 今後

子どもたちが自分たちで劇をつくり上げていくことに楽しさを感じたり意欲的になっていくようにしていく。

2 発表2の概要

(1) 基本的な考え方

○東雲小学校・中学校「図画工作科・美術科」における9年間でめざす生徒像

自分らしい感性に基づいた審美眼をもち、身の回りのさまざまな対象や環境に主体的にはたらきかけながら美的体験を享受し、表現することを楽しむ生徒。

○鑑賞リテラシーとは

鑑賞する対象（美術作品等）から必要な情報を引き出し活用する能力

⇒イメージと言葉とを結びつける力

○鑑賞リテラシーの内容（観察・直観、コミュニケーション、思考・判断）

直観・観察・・・材料、色、形などの関係を直感的にとらえ、自己との対話を繰り返しながら

ら感じ取ること。

コミュニケーション

・言語化したイメージを伝え合い、他者とのかかわりの中でそれを広げ、深めていくこと。

思考・判断

・科学的概念を含む様々な要因を加味しながら分析、解釈し、自分なりの基準で価値判断すること。

○授業仮説（9年間の学びのつながり）

I期（小学校1～4年生）

美術作品から受ける印象や気づきなどを多様な言語に置き換える経験を重ねることが、美的対象に向かう児童の内言の発達を促し、鑑賞学習の基礎を培うことにつながるであろう。

II期（小学校5年生～中学校1年生）

アートゲームの導入によってコミュニケーションを活性化させることが、個々の見方や感じ方の広がり、深まりにつながるであろう。

III期（中学校2年生～3年生）

美的対象に対する個の見方に科学的概念が適切に加えられることにより、より高次の思考が促され、根拠をもとにした総合的な価値判断が可能となるであろう。

(2) 実践の概要

○4つの授業実践から

アートゲーム『どれがピカソ？どれもピカソ！』より

対話型鑑賞『ルソーの描いたヘビ使い』より

アートゲーム『PRESENT FOR YOU～シャガールの不思議な世界』より

対話型鑑賞『拝啓 ゴッホさま』より

○結果と考察

・検証方法・・・気づきの分類（パーソンズによる美的体験の認知上の発達段階を基に開発）

①ワークシートに記述された言葉を抽出し、鑑賞の深まりにおいて3段階に分類

②記述された言葉の質的な推移から集団としての変容を見取る

気づきⅠ・・・描かれている色や形、物や場所、人物などを指し示す言葉（画面上に描かれた事実）をそのまま書いたもの。

気づきⅡ・・・画面やモチーフから、自分なりに感じ取った印象（美醜や明暗など漠然とした感覚を含む）を言葉にしたもの。

気づきⅢ・・・色使いや描かれ方、構図や技法に関する気づき、画面からは直接見取ることのできない音や匂い、状況や雰囲気などを推察した言葉、主題に迫る象徴的な言葉

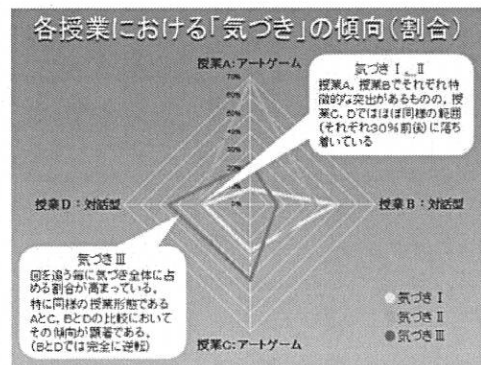
(3) 成果と課題

○成果

- ・「気づき」の数の増加と質の向上
 - ⇒鑑賞学習を主体的に楽しむ児童の姿
 - ⇒イメージと言葉を結びつけるスキルの向上
- ・「気づき」の質の高まり
 - ⇒コミュニケーションによる視点の広がり
 - ⇒他者意識が生む視点の深まり
 - ⇒経験を重ねることによる解釈の多様化

○課題

- ・汎用性の追求・・・より具体的な「気づき」のモデルの作成（評価基準）
- ・個の変容の見取り
- ・気づきの質を高める要因の絞り込み



3 発表1への質疑応答

質問1：自分たちで劇をつくるには、時間がどのくらいかかるか。

回答1：絵本や昔話は日頃の保育の中で取り入れている。具体的には1月末にお楽しみ会なので12月前後から取り組んでいる。1か月から1か月半かかる。

- 質問2：子どものやりたいことをすべて叶えるのは現実的に難しいだろう。実際に難しかったことはなかったのか。
- 回答2：子どもが考えることなので難しいことはない。冬休みを挟むので用意する時間配分の関係で教師が考えて新たな提案やアドバイスをしたりする。なるべく子どもの思いを尊重する。
- 質問3：発表の時間が膨らみすぎることはないのか。
- 回答3：長くなることはある。練習のとき、長すぎたら「ちょっと。」と言いながら削ることもある。折り合いをつけながら子どもの気持ちをくんでいく。
- 質問4：意欲の継続について。1ヶ月かかるものの意欲を実際どう持たせるようにしたのか。イメージがもてない、出せないなどで参加が難しい子どもへの支援はどうしているか。
- 回答4：意欲の継続については、演じる練習は長い時間をとってはいないので、子どもたちの負担になってないと思う。子どもたちが楽しそうに演じている姿やその子なりの表現が出ていることを認めていくことで意欲を持続できるようにしている。イメージできないことについては、具体的なイメージできるようにストーリーを話したり友だちからヒントをもらったりして少しでも意欲をもてるようにしている。
- 質問5：イメージと表現をどう結びつけていくか。語彙の問題や集団の中の人間関係などがあるのか。何でも話して受け入れられる関係づくりをどのようにしているか。
- 回答5：できるだけ集団で話し合いながらストーリーを作っていくので積極的な子とそうでない子がいる。個人的に表現を「こうはどうか」など声をかけ自信をもたせるようにしている。
- 質問6：劇遊びを限られた期間ですると、教師主導が強くなりイメージを固定させてしまうこともあるのではないか。その時の手だてや支援はどうしているか。
- 回答6：「こうしたらいいんじゃないん？」と言いたくなるができるだけ我慢して、じっくり自分を抑えながらやっている。イメージを膨らませるために、あえて物が無いほうがいいときもある。「なくてもできるかな？」というと、自ら動き出したり意欲的になったりする。また、子どもの突拍子もない表現やおとなしい子が表現したときもしっかり認めている。
- 意見1：大切なやりとりだと思う。小学校にも共通すること。教師主導にならず、イメージも固定せず、については、発表にもあったように「どうやったら重たい機関車に見えるのかな？」など、極限に追い込んで子どもたちのイメージを突っ込んだりたたいたりばしたりしていく言葉かけがある。また、「いろいろ出たねえ」のいろいろという膨らませ方。実践を先生がしている。体系の柱を意識されていくと他の場面にも転用できると思う。体系的な物として教師の中に位置付けていくことができる。

4 発表2への質疑応答

- 質問1：1年生も図画工作の時間で美術作品に触れる機会があるのか。
- 回答1：1年生から絵画に触れるようにしている。アートゲームなども取り入れている。子どもから絵をみた印象や気付きなど素敵な言葉がたくさん出てくる。幼稚園の子どもが鑑賞しても絵からたくさん発見があると思う。
- 質問2：児童の創造活動において鑑賞が役立っていると実感されているか。
- 回答2：具体的なデータをとっているわけではないが実感している。例えばシャガールの作品を見た後に青をたくさん使っている児童もいるなど、自身の作品作りにつながっていることが見受けられる。
- 質問3：幼稚園で鑑賞におすすめの事例があれば教えてほしい。
- 回答3：絵をパズルにし、みんなで完成させるアートゲームなどがおもしろい。ピースを見てどこに当てはまるか想像することで絵の全体と部分をよく見ながら鑑賞することができる。

5 指導助言

(1) 発表1について

- 2008年度の改定で「プロセスを大切に」ということがある。教師が特に意識して行うことは次のことできる。
- ・教師が主導・固定化せず教師の目線を変えて、エピソードとしてみてとること。教師の言葉や態度を子どもはよく見ている。

- ・聞く・話す・伝える・子どもの話し合い（言葉・表情など）を丁寧に見てとること。
- 子どもの「〇〇したい」という気持ちに寄り添うために、教師や友だちとのやりとりを丁寧に見てとることが大切。また、教師や友だちの姿を受け止めてやり取りをしつつ、アウトプットをしっかり受け止めることも大切。幼稚園には気づかない宝がいっぱいある。

(2) 発表2について

- 理論と実践がしっかり伝わる内容であった。身につけたい鑑賞リテラシーを9年間（小中）の学びの中でとらえられている。児童生徒の発達段階に応じて学習の積み重ねを重視するとともに、スパイラルな指導を継続して行ってほしい。
- 日々の生活・社会との主体的なかかわりが見えた実践であった。生きる力を身につけるために恰好な内容であり、「日々の生活・社会との主体的なかかわり」の研究として文字化されてはどうか。
- 検証に用いているパーソンズによる美的体験の認知上の発達段階を用いて数値化されている。実践している気づきの分類は身体表現などいろいろな分野にも活用できる。課題とされていた検証の客観性については、数値化することで客観化していくことができる。
- 発表にあった子どもの作文は、自分の生活を再想像したものが表現されている。自分の生活と重なる能動的鑑賞をこれからも実践して行ってほしい。
- 鑑賞の実践は幼稚園や中学校・高等学校にも転用できるものであった。
- 研究を進めるにあたり、「何が・何を・どのように」の視点をもっておくことが大切である。